

らららん13号



2019. 1. 10

明けまして

おめでとうございます

新しい年がスタートしました。今年は大きな出来事がいくつか起こることが報道されています。平成が終わり新しい年号がスタートしますし、消費税も改正されます。幼児教育・保育の無償化も、具体的に進んでいくでしょう。

この1～3月は、平成30年度の3学期で、まとめやしめくくりの時期と言われます。今、子どもたちは、しっかりと成長しています。

幼児部では、どのクラスも「にこちゃんタイム」を大切に取り組んでいる効果だと思うのですが、意欲的に話し合う姿や助け合う姿が見られるようになりました。また、みんなで力を合わせて、完成させる力も備わってきました。

また、乳児部では心も体も成長し、どんどんできることが多くなっていますが、自己主張も強くなり、大人を困らせることも増えているようです。日頃の乳児部の様子を見ると友だちとのかかわりの中で、自然に我慢する力も育っているようです。私も正月に孫と会い、食事中に違うことをやって集中できないことに困りました。親が何度もいうと拒否感もエスカレートしてきました。子どもの感情が高揚しているとき、私が同じように高ぶってはいけないと思い、落ち着いて「今は、やることをきちんとやろうね」と話しました。少し時間は掛かりますが、ちゃんとわかってくれて私もうれしくなりました。

3学期はこれまでの活動を継続しながら、みんながなかよく意欲的な姿勢を伸ばせるように育てていきたいと思っています。一人一人の可能性を大切にして、子どもたちの生きる力となるように全職員でかかわっていきます。ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

エコキャップ運動に参加して

2学期の終業式の前日、きくぐみがNTTの社屋にエコキャップをもっていくことになりました。私も引率のお手伝いをしました。エコキャップは、大きなビニル袋が6袋くらいありました。坂田先生が重さを量ったところ、ワクチン10本分程度はあるだろうと話されました。こんなにたくさんあって、ワクチン10本分は少ない気もしましたが、ワクチン1本分がキャップ860個分といいますからたくさん集める必要があるなと思いました。

幼稚園の玄関には、大きな透明のエコキャップ入れが設置されています。ときどき子どもたちがお家からキャップを持ってきて入れています。そのエコキャップ運動が、どのように行われているのか本当はよく知らないことに気づきました。調べてみると……

今から約15年前、神奈川県的女子高校生が「ペットボトルはリサイクルされるのに、なぜキャップはゴミ扱いなの？」という疑問から生まれたのがエコキャップ運動です。その当時



ボトルはリサイクルの対象でしたが、キャップやラベルは「燃えるゴミ」扱いでした。ゴミは分別してリサイクルと言っているのに、実際はゴミになっていることに矛盾を感じ、キャップのリサイクルを試してみたのです。いろいろなリサイクル業者に相談しましたが、なかなかよい返事はありませんでした。試行錯誤が数年続き、マクドナルドのトレイやボールペンなどの日

常生活で使われる商品を作ることができるようになりました。長い期間が掛かりましたが、リサイクルが本格的に行われるようになりました。

エコキャップ推進協会は2007年の設立以来、エコキャップの売却益の1億2460万円のワクチン・医療支援活動を行ってきました。この活動でポリオ(小児麻痺)の発生を防ぐために大きな成果を挙げることができました。現在はブータンへの寄付が続いているそうです。ブータンは先の東日本大震災のとき、諸外国より先に寄付を行ってくれたそうです。そのお返しにブータンへワクチンの寄付を行っているのです。

もし、ペットボトルのキャップの処理を決めていない人は、遠慮なく園児に持って来させてください。私たちのエコキャップ収集で、今回ポリオの被害から10名の子どもたちを守ることができたと考えれば、私たちはかなりよいことをしたことになります。ポリオは一旦かかると麻痺が治ることはないといわれています。今後も、皆様のご協力をお願いします。

な か む ら す み れ

仲邑 堇さん

新年早々、史上最年少でプロ棋士になる仲邑堇さんが井山裕太棋聖と対局しました。まだ、あどけなさが残る小学生ですが、対局中はとても真剣で、強そうな雰囲気を感じられました。才能がある子どもたちには、どんどんスポットが当たっていいと思います。

大人は、もっと子どもたちの才能の掘り起こしに工夫が必要だと思います。日本では、夏休みの宿題で一番苦しんでいる「読書感想文」ですが、アメリカでは受賞すると、物語の作者とディナーを一緒にする招待状が届くという話を聞いたことがあります。洒落た話で、これなら少しは感想文への抵抗感を和らげることができるかなと思いました。

また、ドイツでは「子どもにやさしい家コンクール」が行われていますが、審査員をすべて子どもたちが担当していると聞きました。子どもたちが自分たちのことを考えた建物かを判断しているのです。実際にグランプリを獲得すると、売れ行きもよくなるそうです。

仲邑さんは、韓国へ武者修行をしたとき、1学年下の子に敗れ、大泣きしたと聞いています。負けず嫌いの性格がよくわかります。誰も負けたり失敗したりすることがありますが、その挫折をバネにする強さを育ててあげたいなと思いました。